Z世代が考える！「未来の食と農」教育プロジェクト

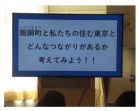
大学名：立正大学 法学部
グループ名：NESラボステーション
代表者名：石垣 彩加
メンバー名：小野瀬 瑞穂、石井 紬稀、佐藤 弓月、清宮 桃花、茂木 紗弥

01 取り組みの目的

●本研究では、学生が農場に訪問し、取材や体験したことを通して学んだことを、出前授業にして小学生に伝えることで、次世代の若者（小学生）の食への関心を高めることを目的とする（山本，2008）。

●この研究活動は、大学生と小学生が教育的な交流のなかで相互に学び、教育的効果を挙げることと相互が成長する機会になることを目標としている（西谷，2023）。

02-ⅰ アウトリーチの方法



●アウトリーチ（活動）とは、シンポジウム、小中高校生向けの出張授業、Webサイトでの情報発信などの活動を通して、広く国民に食と農への興味・関心を喚起するための活動のことである。

●学生が農場に訪問し、フィールドワークを行った。農作物の栽培方法や加工品の製造、販売、地域との関わりなどについて取材、情報収集を行った。その後、集まった情報について訪問した農場ごとにグループに分かれて討論し、小学生に伝えたい内容を教材にした。資料及びPowerPointを作成し、小学校に出向いてアウトリーチを行った。（（アウトリーチは、2024年9月17日に実施した）

02-ⅱ アウトリーチのテーマと概要

●**飯綱町廃校活用施設「地域活性化と農業～廃校施設がつなぐ持続的なまちづくり～」**
カンマッセいいづな創設の想い、若者を呼び込む工夫(イベント発案など)、地域の会社や農家との連携、リンゴ農園と商品開発について(新たなりんごの商品開発と苦悩)

●**飯綱町りんご農場「長野県飯綱町からつながるわたしたちの食生活」**
飯綱町と東京のつながり(農業体験、ふるさと納税、大崎でのマルシェ)、

●**長野県諏訪市トマト農場「〇〇屋さんが敷く未来への道標（みちしるべ）」**
きよみず農園の紹介、農作業の自動化について、機械化・AI化の農業とは

●**世田谷農場「食を学ぶってなんだろう？～世田谷区の食を通じたつながり～」**
食育活動（世田谷区）、農家さんの食育活動、せたがやそだち

●**練馬区トマト農場「愛されるブランドに！～地域とつながる都市農業～」**
農場前の自販機販売、直売所、スーパーでの販売方法、買い物難民の解消、農福連携

フィールドワーク先（2024年度）

8月22日 長野県飯綱町　カンマッセいいづな
8月22日 長野県飯綱町　ファームたんぽぽ
8月23日 長野県諏訪市　きよみず農園
9月3日　世田谷区　高橋さん
9月9日　練馬区　山口トマト農場

03 アウトリーチを受けた小学生の気づきと興味

小学生へのアンケートの質問

質問１．大学生の授業を通して、もっとも興味を持った項目に〇をつけて下さい。
回答選択：①SDGs、②都市農業（地産地消）、③地域活性化、④食（食育、食生活）、⑤その他（記述式）

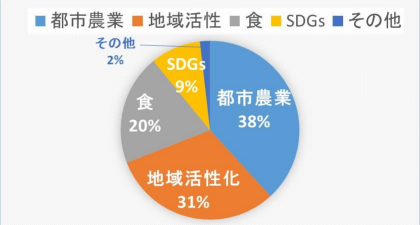
質問２．授業のなかで新たに発見したことは何ですか？その内容を教えて下さい。

アンケートの結果

【表1】質問1の回答

	学校A（n=29）	学校B（n=28）	計
都市農業	13	8	21
地域活性化	5	12	17
食	7	4	11
SDGs	2	3	5
その他	2	0	1

（単位：名）



【図1】子どもたちの興味（n=58）

世田谷区内の小学校２校（６学年）を対象に、大学生の授業を受けた前後の意識の変化について、アンケート調査した結果（表1）をグラフ（図1）にしたものである。

以下は、質問2の回答で見られた小学生の具体的な記述である。

●**都市農業**：地産地消をすることで、価格が安くなり、品質も良くなり、地球にもいいことが分かった／手作業だけじゃなくて、時代や環境に合わせて、農業も変わっていくことや時代はもう電動というところに惹かれた

●**地域活性化**：地域活性化に貢献している道路屋さんがもっと貢献したいと思って、農家になったという話に興味をもった／自分たちのいる東京では、廃校になる小学校はあまりないが、地方では廃校が多いと聞き、それは大変だと思ったが、他の用途に使われているなんて思わなかった

●**食**：私たちに届けられるまでの食育に興味を持った／食生活を整えるということは、食品ロスを減らすことだと気づいた

●**SDGs**：他の農家の方々は、SDGsについてどう思っているかなどが知りたいと思った／販売できないトマトなどはジュースなどにして売り出して、食品ロスを防ぐのがすごい

●**その他**：地域活性化として、AIや機械を使った自動化のようなもの、これからの未来を考えるような授業だった

04 小学生が今後の課題として感じたこと

●都市農業：都市農業を行うのに、土地が狭くても育てられることを知った。家でも家庭菜園を行なってみたい。

●地域活性化：ブランド化を継続していくために、SNSや口コミを書いて応援したい。

●食：トマトを選ぶときはヘタがしっかりしているものを選ぶと新鮮。／「食」に関することが私たちの健康に必要不可欠なものと知り、今までの認識が変わった。

●SDGs：出された食事を残さないことで、食品ロス削減につながる。／使わなくなった物や施設の再利用について、自分たちは何ができるのか考えたい。

●その他：地域の農家さんとできる食育活動（ボランティアなど）を考えたい。

05 考察と課題

●小学生と生産者の仲介を大学生がすることで、若い世代（大学生、小学生両方）の消費者としての生産者への理解を深めることができた。本活動の継続は、将来的に生産者と消費者の距離を縮めることにつながる。（みどり戦略との関連）

●小学生へのアンケートの結果から、「都市農業」や「地域活性化」に関心を持った児童が多かった。その理由として、これら2つの選択肢がより具体的なワードであることや、児童が初めて触れる内容が多かったことが考えられる。実施したアンケートの他にも、授業中に児童から投げかけられた質問や意見は、新たな視点として気付きのあるものが多く、私たちにとっても学びのある時間となった。

●授業では、小学校での通常授業で習ったことや知っていることを発表してくれたり、農業の進化やAIついて関心を持っている児童がいたりと、予想していたよりも食と農について身近に関心を持ってくれている小学生が多かった。

●本取組は、小学校に限らず、授業を受けた小学生たちの家庭を中心として、その周辺に知識や意識として広がっていく。そして関わる多くの方の意識の変化へと期待される。本取組をきっかけとして知識の輪が広がれば、環境を意識したり安定した持続的な消費の拡大に貢献したりと、一定の効果が見込めるはずである。（みどりの食料システム戦略への貢献性）

●若者が義務教育課程の段階で食や農についての詳しい知識や正確な情報を得ることで、環境や生産者に優しい消費の意識が根付いていくと思われる。それが、持続的に環境や食、人についての情報を日頃からキャッチできるアンテナ作りになると考える。（本取組の達成度）

●今後は、本取組における活動を広く知ってもらうことに注力し、食や農を意識して活動してくれる人が増えること、より環境に優しい消費が広がっていくことに重点を置いて取り組んでいきたい。（みどり戦略を通じた本取組の課題）

●引用文献：西谷尚徳（2023）「農業フィールドワークを経験した学生による小学校での授業実践－アウトリーチ活動を含むプロジェクト学習として－」『青少年教育研究センター紀要』**11**,71-80.／山本徳司（2008）「農作業体験学習の前後における子供の意識変化について」『農村生活研究』**135**，30-41.

本プロジェクトを進めるにあたり、農業従事者、農林水産省関東農政局東京都拠点、世田谷区及び品川区の小学校にご協力をいただいた。ここに感謝の意を表する。